

日本語で学位取得を目指す大学院留学生を対象とした 学業・研究活動を支える日本語教育の試み

向井 留実子・金山 泰子

1. はじめに

日本学生支援機構の「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、大学院に在籍する留学生数は年々増加しており、平成29年5月1日現在では46,373人と前年度の6.7%増となっている⁽¹⁾。このような変化に伴い、大学院生に対する日本語教育の強化が求められてきているといえるが、筆者らが注目するのは、そのうち日本語で学位取得を目指す留学生（以下、〈留学生〉）のニーズである⁽²⁾。多くの場合、人文系や社会系の分野を専門とし、日本語で書かれた論文や史資料を解読したり、日本語で論文執筆したりする必要がある学生で、そのための日本語や日本に関する高度で深い知識を学びたいという希望がある。こういった〈留学生〉は留学生の総数から見ると少数であるが、英語による学位取得体制が進む中においても、一定数存在している。彼らが日本文化・社会を深く理解し、日本語による研究を母国に伝えてくれる貴重な人材であることを考えると、彼らへの教育体制整備は重視される必要がある。

しかしながら、現状では、〈留学生〉に対する日本語教育は十分とは言い難い。日本語学習が十分でないために、日本語の専門の論文や資料を読みこなせず、論文作成能力も身につけていない〈留学生〉の扱いに頭をかかえている指導教員の事例も報告されている（實平2017）。筆者らの所属する東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本語教室（以下、日本語教室）においても、アカデミックな日本語のための科目を開講しているものの、時間数が限られている上に、〈留学生〉側に受講する余裕がなかったりするため、自力で日本人と同等に学業や研究活動を進めていかなければならない〈留学生〉も少なからずいる⁽³⁾。

一般的に、大学院で必要とされる知識・能力についての認識は、論文作成やゼミの発表・ディスカッションで必要となる文法・語彙の知識、口頭表現力、文章作成能力といった、いわゆる



図 1

「アカデミックな日本語運用能力」であるが、古い文献を読み解かなければならない分野の留学生にとっては、それに加えて、古典あるいは文語の文法・語彙、くずし字の解説、漢文訓読などの「文語文献解読のための知識」が必須となる。また、専門における講義やゼミのディスカッションの理解を容易にするには、専門知識だけでなく、その前提として日本人と同じ背景知識を身に付けておく必要もある。平尾（1999）は、大学の講義では「専門用語」の解説はなされるが、その分野の研究での概念や知識を表す「学問用語」は、中等教育レベルで教えられているのが前提という認識から、特別な解説がなされないため、留学生の講義理解を困難にさせていることを指摘している。〈留学生〉には、日本人が大学入学までに学んできている各分野の「学問用語の知識」を学ぶ機会を提供することも必要であることを認識しなければならないだろう⁽⁴⁾。

以上で述べた、〈留学生〉に求められる知識・能力の関係を表すと図1のようになる。「専門知識」の前提として、「学問用語の知識」と一部の学生にとっては「文語文献解読のための知識」があり、それらを支えるのが「アカデミックな日本語運用能力」である。それらが土台となって、学業や研究活動が順調に進められるということになる。

そこで、日本語教室では、この「学問用語の知識」「文語文献解読のための知識」「アカデミックな日本語運用能力」にあたる科目・講座の運営や開発を行っている。本稿では、これらのうち、特別講座という形態で行っている「学問用語の知識」「文語文献解読のための知識」提供の実践、通常コースの科目・講座として行っている「文語文献解読のための知識」提供の実践を紹介し、受講者のアンケート結果等から明らかになった課題を提示して、今後の展開への方向性を示す⁽⁵⁾。

2. 「学問用語の知識」「文語文献解読のための知識」を提供する特別講座

2.1 特別講座の実施概要

特別講座で提供する「学問用語の知識」「文語文献解読のための知識」は、単なる日本語指導ではなく、専門教育の入り口となる知識であるため、その分野を専門とする者からの解説が必要との認識から、各分野の博士課程に在籍する大学院生を講師に起用している⁽⁶⁾。また、講座の実施形態は、通常コースよりコマ数を少なくし、学期半ばに開講という形態をとっているが、それは、授業に不慣れな講師にとっては、コマ数が多いと負担が大きく、受講者にとっては、学期初めと学期末は落ち着いて講座に取り組めない、という両者の事情に配慮したことによる。

特別講座のうち、「学問用語の知識」に関わる講座のテーマは、中等教育における教育内容を参考に決定した。具体的な科目名とコマ数は、「留学生のための日本史（以下、日本史）」17コマ（SセメスターはIとして8コマ、AセメスターはIIとして9コマ）、「留学生のための日本の近現代文学（以下、近現代文学）」8コマ（I、IIそれぞれ4コマ）である。「日本史」は2017年度から開始しているが、2年間同じ講師が担当した。「近現代文学」は2018年度から開

始し、ⅠとⅡで異なる講師が担当している⁽⁷⁾。「日本史」は、必要な用語を網羅した中学校の教科書を使用し、1年間で通史を扱う形にした。歴史的出来事の経過を詳細に説明し、毎回受講者からの質問に答えるという形態をとった。「近現代文学」は〈留学生〉の興味関心がありそうな作品を選び、その作家の背景説明や、周辺の事項の解説を映像を用いながら行うという形態であった。

「文語文献解読のための知識」の提供は、主として通常コースの科目・講座（金山泰子日本語教室非常勤講師が担当。内容の詳細は3で述べる）が担っているが、その時間数だけでは不十分との認識から特別講座でも行うことにしたという事情がある。2018年度に、「留学生のための日本の古典文学（以下、古典文学）」8コマ（ⅠとⅡそれぞれ4コマ）、「留学生のためのくずし字入門（以下くずし字）」1コマ開講した。「古典文学」ⅠとⅡは同じ講師が担当した。「古典文学」は当初、通常コースの科目の応用編という位置づけで、ⅠⅡとも文学作品やそれに関わる事項を取り上げる予定だったが、「くずし字」の受講希望者が多く、くずし字の書かれた文献を研究で扱う〈留学生〉が少なくないことがわかったため、Ⅱは、専らくずし字解読のための講座とした。

いずれの特別講座も、〈留学生〉のニーズに応えたものにすることを目指してはいるが、そのテーマに興味関心のある他の留学生も多く受け入れることとし、受講の条件を、日本語能力試験N1合格以上の日本語力という項目のみとした。また、受講しやすくするため、講座の内容も積み上げ方式ではなく、できるだけその回のみで完結するものとし、希望の回のみのお出席でも受講可能とした。ただし、「古典文学」Ⅱのみ、実質的なくずし字の解読スキルを獲得することを目標としたため、全回出席を条件とした。各講座の実施日と内容を表1に示す。

表1 特別講座スケジュール

講座名	実施日	内 容
日本史Ⅰ 全8回	5/14	日本列島の文化のはじまり（旧石器・縄文・弥生時代）
	5/21	律令制以前の古代国家（古墳時代）
	5/28	奈良の都（奈良時代）
	6/4	平安京の時代（平安時代）
	6/11	武士政権の誕生（鎌倉時代）
	6/18	東アジアの中の日本・モンゴル襲来（室町時代）
	6/25	大航海時代の日本（戦国時代）
	7/2	信長と秀吉（織豊時代）
日本史Ⅱ 全9回	10/15	江戸幕府の成立と対外関係（幕藩制・鎖国）
	10/22	江戸時代の社会（身分・百姓・町人）
	10/29	倒幕と明治新政府（開国・戊辰戦争・文明開化）
	11/5	明治国家の建設と対外戦争（議会・憲法・植民地）
	11/12	外に帝国主義、内に立憲主義（普通選挙・社会運動・帝国主義）
	11/19	昭和戦前期の政治と経済（昭和恐慌・日中戦争）
	11/26	アジア太平洋戦争（統制経済・戦時下の国民生活）
	12/3	戦後復興から高度成長期まで（占領・日米安保・55年体制）
	12/10	伊賀者の由緒書にみる江戸時代

近代文学Ⅰ 全4回	5/14	夏目漱石『三四郎』
	5/21	志賀直哉『清兵衛と瓢箪』
	5/28	太宰治『メロイクリスマス』
	6/4	村上春樹『球場に行ったらホーム・チームを応援しよう』
近代文学Ⅱ 全4回	10/15	芥川龍之介「藪の中」を読む－小説と映画と－
	10/22	高浜虚子「俳句はかく解しかく味う」を読む－俳句の読み方・作り方－
	10/29	泉鏡花「化鳥」を読む－小説と絵本と－
	11/5	日本の童謡・歌謡曲を読む－家族はどのように歌われたか－
古典文学Ⅰ 全4回	6/13	古典を読む『徒然草』
	6/20	古典を読む『平家物語』
	6/27	和本を制作する
	7/4	和歌を知る『江戸名所百人一首』
古典文学Ⅱ 全4回	11/14	くずし字を読もう1
	11/21	くずし字を読もう2
	11/28	くずし字を読もう3
	12/5	くずし字を読もう4
くずし字	7/10	くずし字の歴史と学習方法・学習書の紹介

2.2 受講者の背景とアンケートから探る〈留学生〉のニーズ

各講座ごとに、受講者の背景の内訳を表2に示す。

表2 受講者の背景の内訳

講座名		日本史Ⅰ	日本史Ⅱ	近代文学Ⅰ	近代文学Ⅱ	古典文学Ⅰ	古典文学Ⅱ	くずし字	合計
受講者数		20	23	11	10	7	7	12	90
身分内訳	博士課程	4	5	2	2	1	1	3	18
	修士課程	7	8	4	3		1	3	26
	研究生	6	7	4	4	3	3	3	30
	学部生	2				2			4
	特別聴講学生		1	1			1	1	4
	特別研究生		1		1			1	3
	教員	1	1			1	1	1	5
所属内訳	人文社会系	9	5	6	5	4	4	10	43
	法学政治学	2	4	2	1				9
	経済学		1				1		2
	総合文化	3	4		1		1		9
	理学系		1						1
	工学系	3	2	1	1	1			8
	農学生命科学	1	2	1	2				6
	医学系		1				1		2
	薬学系	1	1					1	3
	情報学環		1					1	2
	公共政策	1	1	1					3
	その他 (PEAK)					2			2

出身地域	中国	15	17	9	7	3	4	4	59
	台湾	2	2		2			1	7
	韓国	2	2	1	1	2	1	5	14
	アメリカ	1	1	1				1	4
	ポーランド					1	1	1	3
	フランス		1						1
	ドイツ					1			1
	タイ						1		1

*受講者数には、登録していても1回も出席していない者は含まない。また合計数は、各講座の受講者数の単純合計で、1人が複数の講座を受講している場合もあるが、それを反映した数にはなっていない。

*所属名は、研究科名で示しているが、受講者数には学部生も含んでいる。

受講者の所属を見ると、ほとんどの講座で人文社会系研究科（以下、本研究科）の学生が受講者の半数となっている一方で、理系の研究科の受講者も少ないながらも一定数いる。受講者の背景知識を詳細に調査していないため、推測の域を出ないが、日本史や文学に単なる興味で来ている学生もいるものの、所属が理系であっても、歴史に関わる分野であったり、文系に近い、あるいは文理融合の分野であったりする学生も少なくないようである。興味深いのは、本研究科の学生が「日本史」Ⅰは多く受講しているが、Ⅱでは半数近くなること、「くずし字」では圧倒的に多くを占めるという点である。本研究科の学生の特徴として、近世以降の基礎知識を持っている者が比較的多く、くずし字解読が必要な者がかなりいるといえるのかもしれない。

講座の最終回に、大まかなものではあるが、全体評価、内容の難易度、最も関心を持った回と関心を持てなかった回、感想などを聞くアンケートを行った。以下では、その結果と講師の日記から観察されることを述べる。

「日本史」は、ⅠとⅡを合わせて27人からのアンケート回答が得られた。内容については、やさしかった16人（59%）、普通6人（22%）、少し難しかった5人（19%）であったことから、比較的日本史の基礎知識のある学生が受講していたことがうかがえる。また、全体評価は、25人（93%）がよかったとしており、受講者の満足のいく講座であったようである。このことから、ある程度は「学問用語の知識」が提供できる環境になっていたのではないと思われる。また、戦国時代から江戸時代に関心を示すものが多く、古代や明治時代への関心は薄かった。戦国時代や江戸時代は母国でも取り上げられることが多く、受講前から関心度が高かったといえるが、古代は特に日本史らしいところがなく、明治時代は複雑で理解が困難なためではないかと考えられる。

「近現代文学」の受講者はⅠもⅡもみな日本の文学作品を、翻訳の場合も含めて、読んだ経験があり、文学に興味のある者であった。アンケート結果は、「近現代文学」Ⅰは、7人から回答が得られたが、内容がやさしかった3人、普通3人、少し難しかった1人で、全体評価は、7人ともよかったとしていた。しかし、4人の作家を扱った点に関して、それ以前に概論的知識がほしかったとの要望があった。「近現代文学」Ⅱは、4人の回答であったが、いずれも評

価はよかったとしていた。しかし、内容については、3人が少し難しかった、1人が普通としており、文語文法の知識が必要な作品もあったため、困難な内容であったようである。講師の日記からも、ⅠもⅡも語彙や背景説明にかなり手間取った様子が見え、実際の文学作品を教材としていたため、読解に手間取り、文学の基本的知識を十分に提供するようにはなっていないことがうかがえる。

「古典文学」について、Ⅰのアンケートには、4人の回答があり、全体評価は、よかった3人、普通1人であった。内容については、やさしかった3人、少し難しかった1人で、古典文法の説明を求めている。また、物語などの読解を期待してきたが、和本作成や、和歌の解説もあったため、多少不満を感じたようだった。「古典文学」Ⅱのアンケートにも4人の回答があり、そのうち3人は研究のためにくずし字の習得が必要としていた。4人とも受講前より受講後は読み書きができるようになったとしており、その達成感もあってか、4人ともに、全体評価はとてもよかったとしている。この結果から、「古典文学」Ⅰについては、古典文法の知識をもっと提供する必要がある、和歌ではなく、文章を読むことが望まれており、「古典文学」Ⅱの結果から、スキルを身に付けられる実践的な講座が望まれていることがうかがえる。文語文法をどのように教えていくのか、通常コースの科目とのつながりを検討する必要がある。

「くずし字」は、12人からアンケートの回答が得られ、全体評価は10人（83%）がよかったとしていた。内容については、やさしかった5人（42%）、普通3人（25%）、少し難しかった4人（33%）であった。内容がくずし字成立の歴史的背景からの学術的な説明だったため、困難に感じた人も多かったようである。また、実際の読み書き体験がわずかで、実践的な知識提供を求める人には、不満だったのかもしれない。留学生が講師を務め、外国人の立場から役立つ学習法や学習書の紹介があった点については大変好評だった。この講座での体験部分の不足は「古典文学」Ⅱで解消されたと考えられ、「くずし字」と「古典文学」Ⅱを合わせた内容の講座であれば、ニーズに対応できるようである。

3. 「文語文献解読のための知識」を提供する科目

以下では、2018年度に通常コースで行った「古典入門」（SとA Semester、以下「古典入門S」「古典入門A」）、集中講座「漢文に挑戦しよう（以下、漢文集中）」、「文語文献講読」の概要について報告すると共に、受講者を対象としたアンケート結果から学生のニーズを探る⁽⁸⁾。

3.1 4科目の概要

各科目のスケジュール、授業内容、教材について紹介する。

1) 「古典入門S」

本科目は、文語文法および作品講読を含めた入門として開講した。テキストは『よくわかる新選古典文法』（東京書籍）、『国語総合古典編』（東京書籍）に加えてオリジナル教材を使用した。

表3 「古典入門S」授業スケジュール

	実施日	内容・教材
1	4/19	歴史的仮名遣い 文法用語 動詞 活用表の見方 読み物：『土佐日記』抜粋（現代語と文語の違いに注意しながら読む）
2	4/26	形容詞・形容動詞 助動詞導入 助動詞「き」「けり」 読み物：『今昔物語集』卷三十の十二より抜粋
3	5/10	助動詞「ぬ」「つ」「たり」「り」 助動詞「む」「らむ」「けむ」「らし」「めり」「まし」
4	5/17	助動詞「べし」「なり（伝聞・推定）」「じ」「まじ」 読み物：『伊勢物語』「東下り」より抜粋
5	5/24	助動詞「ず」「たし」「まほし」「ごとし」「る」「らる」
6	5/31	助動詞「す」「さす」 読み物：『今昔物語集』卷十九「検非違使忠明」
7	6/7	読み物：『宇治拾遺物語』卷三「絵仏師良秀」
8	6/14	読み物：『十訓抄』より「大江山の歌」／『伊勢物語』より「芥川」
9	6/21	読み物：『伊勢物語』より「東下り」
10	6/28	読み物：『伊勢物語』と『仁勢物語』／『土佐日記』より「馬のはなむけ」
11	7/5	読み物：『土佐日記』より「馬のはなむけ」／『徒然草』第三十二段
12	7/12	読み物：『枕草子』より「ありがたきもの」／『平家物語』より「木曾の最後」
13	7/19	読み物：『平家物語』より「木曾の最後」

本科目は文法学習のみではなく、「古典入門」として文法と共に文語作品講読も視野に入れて開講した科目ということもあり、受講者のレベルが初心者から既習者まで幅広く混在していた。文法と講読の両方をカバーするために前半で文法、後半で講読というスケジュールを立てたが、前半の文法導入がかなり駆け足となり、既習者には物足りなく、初心者にはペースが速すぎて定着が難しかったという反省が残った。こうした反省を踏まえて、Aセメスターには初心者を対象とした「古典入門A」と、既習者を対象とした「文語文献講読」を開講することにした。以下では「古典入門A」の概略を紹介する。

2) 「古典入門A」

本科目は初心者を対象とした文語文法入門として開講したため、受講者は全員初心者であった。そのため文法を中心としたシラバスを作成し、読み物はあくまで文法の復習として扱った。また定着を図るためにほぼ毎回、前週の学習項目についてクイズを実施した。テキストは、Sセメスター同様『よくわかる新選古典文法』（東京書籍）を使用し、適宜オリジナルプリントで補足した。

表4 「古典入門A」授業スケジュール

	実施日	内容・教材
1	9/16	歴史的仮名遣い／動詞
2	10/3	形容詞・形容動詞／助動詞導入

3	10/10	助動詞「き」「けり」
4	10/17	助動詞「ぬ」「つ」「たり」「り」
5	10/24	助動詞「なり」「たり」(断定) 助動詞「む」「らむ」「けむ」
6	10/31	助動詞「べし」「じ」「まじ」 読み物：徒然草第九十二段「或る人弓を射ることを習ふに」
7	11/7	助動詞「まし」「らし」「めり」「なり」 読み物：『徒然草』第百十段「双六の上手と言ひし人」
8	11/14	助動詞「ず」／助動詞「ぬ」の識別
9	11/21	助動詞「たし」「まほし」「ごとし」「る・らる」「す・さす・しむ」
10	11/28	漢文の基礎
11	12/5	格助詞・係助詞 読み物：『徒然草』第二百三十六段「丹波に出雲といふ所あり」①
12	12/12	接続助詞・終助詞 読み物：『徒然草』第二百三十六段「丹波に出雲といふ所あり」②
13	12/19	間投助詞 読み物：『枕草子』第四十三段「虫は」

3) 「文語文献講読」

本科目は、文語文法の既習者を対象に、文語で書かれた文献を講読する科目として開講した。

表5 「文語文献講読」授業スケジュール

	実施日	内容・教材
1	9/25	『竹取物語』（『古文解釈の方法と実践』筑摩書房）
2	10/2	『源氏物語』（『新日本古典文学大系』）／基本的な敬語表現
3	10/9	『源氏物語』／新聞記事「仇討禁止令条文」（『明治新聞事始め』興津要 大修館 1997）
4	10/16	二葉亭四迷『小説総論』（『日本近代文学大系』第4巻） 新聞記事「新聞売り子廃止」（『明治新聞事始め』興津要 大修館 1997）
5	10/23	森鷗外『舞姫』（『新日本古典文学大系明治編25 森鷗外集』）
6	10/30	伊藤仁斎『童子問』より序文（『日本古典文学大系97 近世思想家文集』）
7	11/6	伊藤仁斎『童子問』より第1章、第2章／岡崎久彦章賞受賞作『文通はし』
8	11/13	荻生徂徠『徂徠先生答問書』（『日本古典文学大系94 近世文学論集』）
9	11/20	篠田仙果『鹿兒島戦争記』（『新日本古典文学大系明治編13 明治実録集』）
10	11/27	本居宣長『源氏物語玉の小櫛』（『日本古典文学大系94 近世文学論集』）
11	12/4	佐久間象山『時事を通論したる幕府へ上書稿』（『現代思想大系1 近代思想の萌芽』松本三之助編 筑摩書房 1966） 「候文とは」（『古文書をはじめる前の準備講座』吉田豊 柏書房2008）
12	12/11	『類聚三代格』巻十四
13	12/18	『類聚三代格』巻十九 勝海舟「日記」（『現代思想大系1 近代思想の萌芽』松本三之助編 筑摩書房 1966）

本科目は、中古から戦前までの時代にわたり、様々なジャンルの文献を幅広く扱うという目的で開講し、受講者のニーズに応えつつ教材を選択する後行シラバスの形をとった。開始初日に要望を聞いたところ、全員が「時代を問わず様々なジャンルのものが読みたい」という意見であったため、まずは時代順に物語作品の講読から始めたが、コースが進むにつれ、次第に学

生の研究対象である近世・近代の評論、文書などに絞られていった。学期最後の2回は、受講者の要望から古文書『類聚三代格』を扱った。授業の進め方としては、前週に次回の読み物を配布し、授業では音読、現代語訳をしつつ、文法、語彙表現、文意、時代背景との関連、文体の特徴について質疑応答、ディスカッションを行った。

4) 「漢文集中」

本講座は、105分×2コマ×5日間で漢文訓読の基礎を学ぶ集中講座として実施した。まず、日本における漢文の歴史的経緯や日本漢文の特徴などの概略を説明した上で、漢文訓読の練習を行った。

表6 「漢文集中」授業スケジュール

	実施日	内容・教材
1	9/10	漢文とは／送り仮名／返り点
2	9/11	文語文法の基礎知識（用言の活用、助動詞ず・る・らる・しむ・たり・なり・ごとし） 置き字・書き下し文
3	9/12	文語動詞の活用／返読文字・再読文字 演習：『画竜点睛』『世説新語』第十九
4	9/13	返読文字（否定） 演習：『皇朝史略』
5	9/14	返読文字（可能・不可能／受身／使役） 演習：白文に挑戦『史記』より「李広伝」／近代の漢文『航西日記』

学習者たちが最終的に目指すところは、いわゆる「日本漢文」を白文の形で訓読できるようになることであるが、本講座ではまず基本を習得することを目標とした。初日の段階で、訓読に必要な文語文法の知識、特に用言の活用が理解できていない学生が散見されたため、適宜文語動詞、助動詞の活用の復習を補いつつ授業を進めた。

3.2 受講者の背景とアンケートから探る〈留学生〉のニーズ

各科目の受講者の背景は表7のとおりであった。

表7 受講者の背景内訳

科目名	古典入門S	古典入門A	文語文献講読	漢文集中	合計	
受講者数	10	10	8	14	42	
平均出席者数	7	7	5	12	31	
身分内訳	博士課程	1		7	4	12
	修士課程	2		1		3
	研究生	6	9		10	25
	特別聴講学生		1			1
	外国人研究員	1				1
所属内訳	人文社会系	9	6	7	11	33
	法学政治学		1			1

所属内訳	総合文化	1	3	1	2	7
	情報理工学系				1	1
出身地域	中国	5	7	7	8	27
	台湾		1		1	2
	韓国	2	1			3
	ポーランド	1	1		2	4
	ブルガリア	1		1	1	3
	ベトナム	1				1
	インド				1	1
イラン				1	1	

開講した3科目1講座では、学生を対象としたアンケート調査を実施した。ここではその中から学生のニーズを中心に報告する。以下は受講者の専門分野の内訳を示したものである。

表8 受講者の専門分野内訳

科目名		古典入門S	古典入門A	文語文献講読	漢文集中	
回答者数		9	9	8	14	
専門分野	言語学	2		1	2	
	歴史学	南北朝	1			
		近世	2	1		
		近代		5	2	1
	思想	中国近現代				1
		日中近代		1	4	
		日本近世	1		1	3
		明末清初				1
		明代	1			1
		宋明理学				1
	美学芸術学	1				
	中国語中国文学	1				
	政治学				1	
	刑法学		1			
室町から近世の食文化	1	1		1		
明治期日本人の旅行記				1		
コンピューターグラフィックス				1		

* 研究対象が「近世及び近代」など時代がまたがっている場合は、それぞれ近世1、近代1とカウントした。

学生によって記述の仕方が大まかなものから詳細なものまでまちまちであったが、研究の対象となっている時代に着目して見てみると、全体的に近世・近代（或いはその時代を含む）が多いことがわかる。「古典入門S」では9人中4人（44%）、「古典入門A」では9人中7人（78%）、「漢文集中」では13人中10人（77%）、「文語文献講読」では8人中7人（88%）と、どの科目でも半数近くから大半の学生が近世、近代を研究対象としている。つまり「古典」の中でも、古代・中古よりも近世以降の文語文献を読む必要があるということである。

金山（2010、2014）が文語を学ぶ北米大学院生を対象に実施した調査結果では、専攻としては歴史学が最も多く、また時代では近世から近代が多いことが指摘されている。本コース受講

者は表7に示したように中国人学生が大半であるが、世界的に日本研究の対象が近世から近代の時代に集中している傾向にあることがうかがえる⁽⁹⁾。

さらにアンケートには、学生は研究のために読む必要がある文献、読んでみたい作品などについて記述してもらった。

「古典入門S」のアンケートでは、読んでみたい作品の時代・ジャンル（複数回答可）、具体的な作品・作家名を回答してもらった。時代では、中古が4人、近世・近代がそれぞれ3人ずつであった。ジャンルは、物語4人、日記5人、随筆3人、歴史書2人、公文書1人であった。さらに作品・作家には、平安時代の古典文学作品、平家物語、吾妻鏡、漢学・漢文にかかわる研究書、『学問ノススメ』、福沢諭吉、佐久間象山、岡倉天心、『枕草子』、『源氏物語』、『伊勢物語』、『古今和歌集』、『玉勝間』（本居宣長）、『論語徴』などの回答があった。本科目は上述したように「古典入門」という文法と講読をかねた科目であり、受講者のレベルや専門分野が多岐にわたっていたため、ニーズも多様であった。

「古典入門A」では、研究のために読む必要がある時代、ジャンル、文献名を記述してもらった。回答は、『台湾総督府公文類纂』、『台湾日日新報』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『読売新聞』、江戸時代の町人関係文献・名主関係文献、明治・大正・昭和期の判例、近代日中貿易記録・外交文書・税関報告、大正から昭和戦前までの公文書・新聞記事・日記・手紙、明治から大正前期の外交文書、林羅山・伊藤仁斎など江戸時代の儒学についての文献、などであった。本科目は、文法入門科目であったため、クラスでは文法復習のための文語文を練習として読むことに留めたが、学生が研究のために必要なのは、近世から近代にかけての文語文献であることがわかる。

「文語文献講読」でも研究のために読む必要がある時代、ジャンル、文献名について記述回答を求めた。回答は、中国明代の漢文訓読、江戸時代の古文・候文、幕末から江戸期の文献、和文で書かれた思想系文献（随筆・教訓書）、本居宣長『くず花』、候文、明治初期の書簡類、近代・近世思想、近世国学者の文献特に日本文学論、本居宣長『柴文要領』、江戸時代の仏経注釈書、大正時代から昭和前期までの公文書・手紙・日記・新聞、近代の日記・外交文書・公文書・雑誌・新聞、『類聚三代格』など古代の文献などであった。彼らの研究対象も全て近世から近現代にかけての文語文である。これらの回答を参考に実際の授業では本居宣長、佐久間象山、荻生徂徠、伊藤仁斎、『類聚三代格』を取り上げたが、これらはいずれも漢文、または漢文調の文体である。

「漢文集中」でも同様のアンケートを実施した。回答は、旅行記の漢文・漢詩、明治時代の日本外務省の外交文書・書簡・電報・日記、『近衛篤磨日記』、『螢雪余聞』、中国の古典、近世の文学論などであった。その他に、「中国語を日本語の書き下し文にする必要がある」という回答もあった。

上記の回答結果を概観してみると、受講者のニーズは、時代としては近世から近代が多く、漢文または和漢混淆文の文体で書かれた文献を読む必要があることがわかる。漢文も中国古典を訓読するいわゆる「純漢文」ではなく、変体漢文、日本漢文を訓読できるようになることが

求められている。また和文であっても、近代の日記、書簡などは、漢文調の慣用表現が多用されているため、それらを習得することが必要である⁽¹⁰⁾。

こうした〈留学生〉のニーズを踏まえ、今後の「古典入門」「文語文献講読」「漢文集中」のシラバス・教材をあらためて検討していく必要がある。近世・近代の文献が読めるようになるというゴールを見据えた文語文法・漢文教材の見直し、さらに、3科目が効果的に連動できるように配慮したコースの整備が課題である。

4. 課題と今後の展望

特別講座では、「日本史」がニーズにある程度合致しており、「学問用語の知識」を供給する場となっていることがうかがえた。しかしながら、本研究科の学生が「日本史」Ⅱをあまり受講しない傾向があった。これは研究対象が近世以降の学生が多いことによると思われるが、「学問用語の知識」という観点から考えると、ある程度日本史の知識があっても、自分の専門と関わる部分に限られたりして、日本史全般の「学問用語の知識」は習得していない可能性があり、全体の受講を勧めることも必要かもしれない。一方で、そのような学生でも受講に耐える講座内容にしていく必要もあろう。「近現代文学」については、受講者のニーズに対応できていない面があり、今後概論的な内容を盛り込んだり、内容の難易度を下げるなど調整をする必要があるようである。「古典文学」はテーマをくずし字とすることによって、ニーズに応えた講座とすることができた。しかしながら、「近現代文学」にせよ「古典文学」にせよ、文語文法の知識が必要で、その知識を体系的に学べるようにしていく課題があることは再確認できた。

「文語文献解読の知識」を提供する科目については、既習者と未習者の混在を解決するために、2018年度より既習者向けの新たな科目「文語文献講読」を開始したが、このことにより〈留学生〉は学びやすい環境にはなったようである。しかしながら、それはニーズ対応の第一歩に過ぎない。読まなければならない作品の時代や文献の性質によって、必要な知識も違っており、一人一人が全く違うニーズを持っていると言っても過言ではない。このニーズに対応するためには、まだ検討しなければならないことは多いが、まずは、受講生に加え、独習成功者や教員に対して、聞き取り調査等を行い、その結果に基づき「古典入門」「文語文献講読」「漢文集中」などの科目内容の見直しや、3科目の連動、さらには、くずし字に関わる講座との調整もしていきたいと考えている。

坂内（2004）には、本研究科における文語文読解指導の必要性について実態を明らかにするため、1998年に行った調査の結果が紹介されている。そこで示されたことの多くは本稿の結果に重なるものではあるが、その指導方法は20年を経た今でも十分に開発されたとは言えない状況にある。「文語文献解読の知識」を必要とする〈留学生〉は限られており、その指導ができる教員も少ない現状にあっては、大学を超えて日本語教員間での連携をするとともに、文語文理解が必要となる専門分野の教員との連携も進め、知見を蓄積していく必要がある。

「学問用語の知識」についての特別講座は、当初より各専門分野の教員の協力のもと、講師

の選定や講座の運営を行ってきた。しかしながら、その連携はまだ始まったばかりであり、現在の講座のテーマも、日本史と文学のみに限られているため、十分とは言えない。今後も引き続き、専門分野の教員の協力を仰ぎながら、「学問用語」に関わる新たな講座の開講も実現していきたいと考えている。

5. おわりに

本稿では、試行的に行っている特別講座と通常コース科目・集中講座の現状を紹介した。いまだ手探りのため、体制作りには、さらなる調査や試行が必要であるが、〈留学生〉のニーズのほんの一部には応えられつつあるようである。引き続き、「文語文献解読のための知識」については新たな教材や指導法の開発を、「学問用語の知識」については大学院生を起用するという新たな実施形態での展開を進めて、人文社会系研究科に設置された日本語教室という特徴を生かした新たな役割も模索していきたい。

謝辞

本稿で紹介した特別講座・日本語科目の実施にあたっては、日本史学研究室および国文学研究室的の先生方や院生の皆様から多大なご協力を賜りました。この場を借りて、感謝の意を表したいと思います。

註

- (1) 日本学生支援機構「平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査結果」による。
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html(2018年12月31日閲覧)
- (2) 〈留学生〉とは、身分では、大学院修士課程、博士課程の留学生、および大学院入学を目指す外国人研究生を指す。
- (3) アカデミック日本語のための学習を希望する〈留学生〉が多いため、日本語教室でもそのための科目をセメスター中に10～11コマ開講し、時間割の配置も工夫しているが、専門の授業やゼミ発表、調査などの都合で、受講できない、あるいは受講していても途中で止めなければならない者も少なくない。
- (4) 学部生の場合は、「日本留学試験」に日本の高校で学ぶ「公民」、「地理」、「歴史」を合わせた総合科目があるため、ある程度の「学問用語」は身に付けて入学するが、大学院から入学する場合は、そのような日本語の「学問用語」の知識を持たずに入学するため、問題が生じることが多い。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室(2016)にも、専門教育と日本語教育を結ぶ教育の必要性が指摘されている。
- (5) 「アカデミックな日本語運用能力」に関わる科目のうち、論文執筆のための科目については、向井(2018)で紹介しているため、本稿では省略している。なお、通常コースの科目・講座とは、セメスターや長期休暇中に教員が担当する科目、集中講座を指している。
- (6) 博士課程の大学院生を起用しているのは、今後研究者として大学の教壇に立つことが見込まれる学生であるため、教育経験を積む場となり、留学生との実質的な接触により国際的な感覚を育てる場となると考えたためである。主に日本人を対象としているが、専門知識のある留学生も起用している。院生起用の効果の詳細は向井(2018)で紹介している。

- (7) 「日本史」は、いずれの分野にも共通して必要な知識であり、全体像をつかむには時間がかかるためコマ数を多くしているが、「近現代文学」は受講者数が見通せないことから、半期4コマとした。なお、「日本史」Ⅱの最後の1コマのみ、総括として実際の講義理解に挑戦してみるという目的で、日本史学研究室の教員に講義を依頼している。2018年度は、牧原成征准教授にお願いした。2017年度に実施した「日本史」の詳細は、向井(2018)に紹介しているため、本稿では省略する。
- (8) 日本語教室では、1998年度より古典や文語文を読むための講座が開講されていたが、いずれも夏季集中で行われるものであった。開講開始当初の受講者ニーズは、坂内(2004)に紹介されている。学期中に行う科目に移行したのは、2016年度からで、2016年度と2017年度は学期中に「古典入門A」「古典入門B」、夏季休暇中に「漢文集中」を実施した。2018年度はそれに加え、学期中に「文語文献講読」を開講している。いずれも、〈留学生〉に限定せず、日本語力が高く、興味関心がある者も受け入れている。なお、本稿では2018年度のみ取り上げる。
- (9) 金山は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの文語文法コース受講者を対象に実施したアンケートについて、2003年から2010年まで(2006年を除く)の受講者総計100名、2003年から2014年まで(2006年を除く)の受講者総計169名の回答結果をまとめたものを報告している。詳細は金山(2010、2014)に紹介されている。
- (10) 和漢混交文、漢文訓読調の文語文献読解学習に対する留学生のニーズについては、坂内(2004)、佐藤(2015、2017)らによって指摘されている。

参考文献

- 金山泰子(2010)「中・上級学習者のための文語教育-2002年度-2009年度受講者のアンケートから探る今後の課題」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』33、pp.112-126
- (2014)「中・上級学習者のための文語教育-2002年度-2014年度文語コース履修者アンケート及び実践報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター年報』4、pp.59-70
- 實平雅夫(2017)「日本語教育に関する教員アンケート」『神戸大学留学生教育研究』1、pp.51-80
- 佐藤勢紀子(2015)「文語文を学ぶ漢字系学習者が困難を感じる点—中国・台湾の日本学研究者に聞く—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』7、pp.163-172
- 佐藤勢紀子・虫明美喜・楊錦昌・小野桂子・押谷祐子(2017)「非母語話者を対象とする日本語文語文 e-learning 教材試作版の開発」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3、pp.307-314
- 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室(2016)『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部国際交流室・日本語教室記念誌』
- 坂内泰子(2004)「留学生と文語文読解の必要性」『神奈川県立外語短期大学紀要 総合編』27、pp.59-74
- 平尾得子(1999)「講義聴解能力に関する一考察—講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題点—」『日本語・日本文化』25、pp.1-21
- 向井留美子(2018)「日本語で学位取得を目指す大学院留学生への指導・支援の課題：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部における実践を通して」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』31、pp.49-62